



Title	第3回スペイン語の形態論・統語論・意味論・語用論 の関係と境界に関する国際学会参加報告
Author(s)	川口, 正通
Citation	ヨーロッパ超域研究. 2025, 6, p. 49-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102472
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第3回スペイン語の形態論・統語論・意味論・語用論の関係と境界に関する
国際学会参加報告

川口 正通

1. はじめに

2024年11月21日と22日の2日間、スペインのコルドバ市で開催された第3回スペイン語の形態論・統語論・意味論・語用論の関係と境界に関する国際学会（III Congreso Internacional “Relaciones y límites entre la morfología, la sintaxis, la semántica y la pragmática del español”）に参加する機会を得た¹。本稿では次の第2節でその概要を紹介し、第3節ではいくつかの研究発表および基調講演について、その内容を簡潔に報告する。

2. 会の概要²

この学会を主催したのはコルドバ大学の言語科学科（Departamento de Ciencias del Lenguaje）である。当該学科のウェブサイトによると、この学科は哲文学部、教育科学部、労働科学部の3つの学部にまたがって教育研究をおこなっているとのことである。本学会の開催は今回が3回目であり、1回目は2018年、2回目は2020年に、いずれもコルドバ大学でおこなわれた³。今回の第3回では2件の基調講演と41件の研究発表がおこなわれ、これは第1回大会の約2倍であるという。

学会ウェブサイトによると、学会のテーマはその名称が示す通りスペイン語の形態論、統語論、意味論、語用論の関係であり、テーマの具体的例として情報構造、談話標識、動詞の意味的選択、語彙化と文法化のプロセスなどが挙げられている。

¹ 本学会への参加は、JSPS 科研費 19K13296 の助成を受けて実現したものである。

² 第2節の執筆においては、学会会場で得た情報に加えて、学会ウェブサイト（<https://relacioneslimitesespanol.wordpress.com/>）、コルドバ大学言語科学科ウェブサイト（https://www.uco.es/ciencias_lenguaje/wp-cdl/）、当該学会開催の内容を扱ったコルドバ大学ウェブサイト内のニュース記事（<https://www.uco.es/servicios/actualidad/vida-academica/item/157312-arranca-el-iii-congreso-internacional-relaciones-y-limites-entre-la-morfologia-la-sintaxis-la-semantica-y-la-pragmatica-del-espanol>）の情報を参照している。

³ ちなみに第1回の名称は I Congreso Internacional “Relaciones y límites entre la morfología, la sintaxis y la semántica del español” であり、語用論（pragmática）は含まれなかったようである。

学会の会場は1日目と2日目で異なり、1日目の会場となったのは大学本部の建物の中にあるムデハルの間（Sala Mudéjar）、2日目の会場となったのは哲文学部キャンパス内の講堂（Aula Magna）と教室である。哲文学部のキャンパスはコルドバ市中心部のいわゆるユダヤ人街（la Judería）に位置し、コルドバ市のシンボルであるイスラム教寺院（Mezquita）から徒歩5分程度の場所である。

本学会の参加者はスペイン国内の大学に所属する研究者が大半を占めたが、それ以外にメキシコやアルゼンチンといった中南米諸国、およびイタリアやフランスといったヨーロッパ諸国の研究者も参加していた。ちなみに日本人の参加者は筆者と、マドリードのカルロス3世大学（Universidad Carlos III）で教鞭をとり、閉会の基調講演を担当した森本祐子氏の2名のみであった。

今回の学会では、セッションごとに類似したテーマの発表がまとめられている部分もあったが、明確な分科会は設定されていなかった。また2日目のみ、哲文学部キャンパス内の講堂と教室の2か所に分かれて研究発表が行われたが、こちらもテーマによって分けられているという印象は受けなかった。さらに研究発表に関しては、大学院生による発表はなく、すべての研究発表がいわゆる「教員」によるものであったことも特筆すべきであろう。

3. 基調講演・研究発表について

本節では、当学会でおこなわれた基調講演と研究発表の中からいくつかを抜粋し、その概要を紹介する。

開会の基調講演はスペイン王立学士院（Real Academia Española）およびマドリードコンプルテンセ大学の Ignacio Bosque 氏による「等位連結と文法要素の分布（La coordinación copulativa y la distribución de los componentes de la gramática）」で、スペイン語の等位接続詞 y に関連するいくつかの矛盾（paradoja）を取り上げ、それらに対してどのような解決の可能性があるかを論じたものだが、その際、統語的観点だけでなく、音韻的観点も導入することで説明が可能であるとする。

次に研究発表について、まずバルセロナ大学の Mar Garachana Camarero 氏とジローナ大学の Avel·lina Suñer Gratacós 氏による「llevar 時間＋現在分詞構文の迂言的性質について（Acerca del carácter perifrástico de las construcciones llevar temporal + gerundio）」では、llevar 時間＋現在分詞構文を迂言句と見なすべきか否かという問いに対して、伝統的な基準によって判断するならば、少なくともプロトタイプの迂言法ではないとの主張がなされた。

メキシコ都市自治大学（Universidad Autónoma Metropolitana de México）の Milagros Alfonso Vega 氏とメキシコ国立自治大学（Universidad Nacional Autónoma de México）の Chantal Melis 氏は「語彙的動詞と文法化された単位の曖昧な境界—分析の一提案（Límites difusos entre verbos léxicos y unidades gramaticalizadas: una propuesta de análisis）」において、いわゆる準繫辞動詞（verbos semicopulativos）や軽動詞（verbos ligeros）などと呼ばれる動詞と語彙的意味を有する動詞との境界は段階的であり、その区別において談話的プロミネンス（prominencia discursiva）の概念が援用可能であると説いた。

サンアンドレス大学（アルゼンチン）の María Marta García Negroni 氏の発表「ラプラタ川流域のスペイン語変種における談話標識 A ver が有する会話・論証的指示について（A propósito de las instrucciones dialógico-argumentativas contenidas en el marcador de discurso A ver en la variedad rioplatense del español）」では、談話標識 a ver は、従来言われている、発言を遅らせることで会話のターンを維持する機能の他に、話者自身あるいは対話者の発言をより具体化したり再考したりする機能を持つことが指摘された。

アルカラ大学の Silvia Gumiel Molina 氏らの「経験と語彙的一致—resultar の統語論・意味論・語用論（Experiencia y concordancia léxica. Sintaxis, semántica y pragmática de resultar⁴）」では、統語的分析およびコーパスを用いた後続する形容詞の頻度調査を通して準繫辞動詞 resultar の特性として、後続する形容詞は、与格と同一指示の経験者を持つことを指摘した。

バレアレス諸島大学の Ruth Miguel Franco 氏らの「マジョルカ島のスペイン語における談話標識 pues の進化と用法（Evolución y uso del marcador discursivo “pues” en el castellano de Mallorca）」ではコーパス調査により、マジョルカ島においては 17 世紀時点ではカタルーニャ語を母語とする話者の発話において pues の使用は見られず、18 世紀以降に部分的に発生したことが指摘された。

マドリードコンプルテンセ大学の Pilar Pérez Ocón 氏らの「人称の特異な用法について—恣意的な単数（Usos desplazados de la persona gramatical: los singulares arbitrarios）」では、2 人称単数代名詞 tú および uno によるいわゆる総称的用法が生じるプロセスとして、各形式の意味および文脈からの語用論的推測によるものであることなどが示された。

カルロス 3 世大学の森本祐子氏の基調講演「時と空間—アスペクト的概念の空間的表現の領域への適用（Tiempo y espacio: aplicación de conceptos aspectuales al ámbito de expresiones espaciales）」では、従来の分析において空間的表現が他の領域に転用されたものとして扱われる事例があるが、必ずしも空間的表現を基本としてその転用と捉えるのではなく、ア

⁴ プログラムに記載された発表タイトルから変更されていたため、変更後のタイトルを記載している。

スペクト研究の手法を援用した、空間領域とアスペクト領域の統一的分析の可能性が示唆された。

コルドバ大学の Nerea Chaves Esquinas 氏の発表「<empezar a + 不定詞>と<ponerse a + 不定詞>—入動・起動の動詞迂言句における形態論・統語論・意味論・語用論の境界と関係 (<Empezar a + infinitivo> y <ponerse a + infinitivo>: límites y relaciones entre la morfología, la sintaxis, la semántica y la pragmática de las perífrasis verbales con significado ingresivo e incoativo⁵⁾」では、類似した意味をあらわすとされる、<empezar a + 不定詞>と<ponerse a + 不定詞>について、頻度、微妙な意味、時制の制約、不定詞にとる動詞の語彙アスペクトの制約等について明らかにされた。

レンヌ第二大学の Natalia Criniti 氏の「時制から談話標識へ—ラプラタ地域のスペイン語における he dicho の場合 (De tiempo verbal a marcador discursivo: el caso de “he dicho” en el español del Río de la Plata)」と題された発表では、コーパス分析を通して、ラプラタ地域で用いられる he dicho という形式が談話標識であること、およびその談話的機能が示された。

最後に、今回の学会で唯一、スペイン語教育に関する発表であった、コルドバ大学の Katarzyna Danuta Kolodziej 氏による発表「形式上伝統的なものにおける語用論的に必要なもの—上級レベルの外国語としてのスペイン語教科書での叙法選択における意図性のニュアンスの扱いとアプローチの提案 (Lo pragmáticamente necesario en lo formalmente tradicional: análisis del tratamiento de matices intencionales en la selección del modo en manuales de ELE en niveles avanzados y propuesta de abordaje)」では、現行の主要なスペイン語教科書では、直説法と接続法の用法の説明において、語用論的側面を加味した説明がなされていないこと、その必要性などに関する提案がなされた。

以上、本節では今回の学会でおこなわれた基調講演と研究発表の中からいくつかを抜粋し、その概要を紹介した。

4. おわりに

本稿では、第 3 回形態論・統語論・意味論・語用論の関係と境界に関する国際学会の概要と、いくつかの基調講演および研究発表の内容を紹介した。上述の通り、この学会は過去に 2 回開催され、今回が 3 回目であったが、過去の大会での発表をもとに *Entre la morfología, la sintaxis y la semántica: límites e intersecciones* (Editorial Tirant Lo Blanch, 2020 年)、*En torno a la delimitación de determinadas categorías lingüísticas* (Editorial Mouton de Gruyter, 2022 年)、*Perspectivas actuales sobre el análisis del discurso del español y su estudio*

⁵⁾ incoativo, ingresivo の訳語は高橋(2023: 47)を参照した。

basado en corpus (Editorial Tirant lo Blanch、2022 年) という 3 冊の出版物が世に出されている。今回の学会でおこなわれた発表も、書籍として出版されるものと思われる。

今回の学会では、スペインを含むヨーロッパおよび中南米各国のスペイン語学研究者による最新研究に直接触れ、また研究発表の合間にはそれらの研究者と個人的に意見交換することも出来た。また個人的には、長年会っていなかった研究者との再会や、過去の自身の研究において熟読の上、詳細に引用した論文の著者と知り合うことも出来、大変有意義な機会となった。本稿が、わずかでも日本のスペイン語学・スペイン語教育研究者の参考になれば幸いである。

参考文献

カディス大学ホームページ内、第 1 回大会の情報掲載記事

<https://ila.uca.es/noticia/i-congreso-internacional-relaciones-y-limites-entre-la-morfologia-la-sintaxis-y-la-semantica-del-espanol/> (閲覧日：2025 年 3 月 4 日)

コルドバ大学言語科学科ホームページ

https://www.uco.es/ciencias_lenguaje/wp-cdl/ (閲覧日：2025 年 3 月 4 日)

コルドバ大学ホームページ内、第 3 回大会の開催を扱った記事 (“Arranca el III Congreso internacional ‘Relaciones y límites entre la morfología, la sintaxis, la semántica y la pragmática del español’”)

<https://www.uco.es/servicios/actualidad/vida-academica/item/157312-arranca-el-iii-congreso-internacional-relaciones-y-limites-entre-la-morfologia-la-sintaxis-la-semantica-y-la-pragmatica-del-espanol> (閲覧日：2025 年 3 月 4 日)

第 3 回大会ホームページ

<https://relacioneslimitesespanol.wordpress.com/> (閲覧日：2025 年 3 月 4 日)

高橋覚二 (2023) 『スペイン語文法用語集 (*Lingüística Hispánica* 別冊第 7 号)』, 関西スペイン語学研究会.